

一般の部

入賞

広島県知事賞

父と

病院に行く父を車に乗せる
こぶしを握った手を膝に置いて

前を向いたまま動かない

写真屋のお客さんみたい

はい締めますよ

パチン

父が乗るカブのうしろにまたがり
書道教室や写生大会に出かけた

ん、とあごをあげると

父の手が白いヘルメットをパチンと締める

カブを手放した日から

福山市 高垣 亜矢

父は死の影に怯えだした

覚えてる?

父はわたしの誕生日を言つた
病院へ行く日を何度も聞いた
けつこうな年齢になつた娘に
「五十か、まあよかろう」と首を振つた
振り落とした夢があつたことを
初めて聞いた

写生大会で描いた車の窓に
父とわたしを小さく入れた
迎えに来た父には見せなかつた
そよぐシャツとたばこの匂い
横に走る二人の影を見ていた

広島県議会議長賞

命をつなぐ米

呉市 溝口 京子

米にまつわるニュースが

日々波のように打ち寄せてくる

「備蓄米、五キロ三千円」

数字が独り歩きする

胸が騒ぐ

子供時代の物語が私を呼ぶ

白く光る一粒一粒に命を見た

洗う時、一粒も流してはいけない

食べ残すとお茶碗から火が出て

二度と食べられなくなる

我が家の小さな田は宝物

父は牛とともに、土の匂いと声を聴く

母は糲を撒き、命を育てる

私の指先が、油紙を敷く作業を手伝う

命が顔を出すと、カエルの合唱が響く
オタマジヤクシが水面に光り囁きあう
家族は腰をかがめて、綱の印に
明日の命をつなぐ

稻穂が実ると、鎌の音

汗と泥と、稻の重さが肩に響く
背中の痛みは、明日の命をつなぐ

あれから六十数年

田は広大になつた

温室で苗は育つ

機械が明日の命をつなぐ

それでも、畔の草は、人の手で刈る
もう大豆は植えない

焼けた肌と汗が、黙々と今日も草を刈る
胸のどこかが熱くなる

風に揺れる稻穂が謳う

科学の力と農業者の知恵を生かせと
若い手に誇りをともす知恵を出せと

広島県教育委員会賞

ゲンへの手紙

どこかで出会つたあの裸足の少年は
いつも怒りをあらわにしていた

(ヒロシマのことは知つてゐるけど知らない
ヒロシマのことは知らないけれど知つてゐる)

あなたは受難に遭いましたね

私はアメリカくんだりにまで出向いて
あなたのことをお話したのです

そこで何かを手に入れた気になつていましたが

スーツケースを開けたら

出てきたのは美しく輝く千羽鶴の束だけで

あなたからの手紙は

どこかで失くしてしまつたようです

あの日あなたから託された宿題

広島市 大澤 優子

あの残酷な爆弾が二度と使われないために
どうしたら良いか

私のノートは空白のまま時が経ち
とうとう八十年めの日を迎えてしました

漫画家となつたあなたの眼の中の
強い光は今も忘れることができません

そそう

それでも小さなコミュニティーセンターの
片隅には地元のアメリカ人の誰かが
用意してくれた私の資料のコピーの束が
置かれていました
アルファベットの文字の中に
あなたの顔が埋もれていたのです

その顔は笑つていたのに
それを読んだアメリカたちは
なぜか沈痛な表情を浮かべていました
あなたは今や

何十ヶ国語も話せるようになつて
世界中を飛び回つてゐるのですね

あなたの強さも勇気も持ち併わせてはいませんが

「まだまだ言い足りていらないのだから」

一度だけインタビューした

あの漫画家の先生の言葉が

いつまでも胸に突き刺さつて疼くのです

つたない言葉でしか綴れませんが
いつかまた

この手紙の続きを書きたいと思います

そのときは少しは良いことを
ご報告できればいいのですが。

骨

掘り起こされた土地に

白く、ひび割れた骨が埋もれている

雨が降るたびにその表面は

滑らかに湿り、

風が吹けば

細かく碎ける

この骨たちは語らない、

戦火の中で散り散りに消えていった

命の記憶も、

傷つけられた地面も、

すべてが無音であつた

ただ、あらゆるものの中を静かに残している

赤い空が燃えた時、

あらゆる生命が数えきれないほどの瞬間に

同時に消えた

広島市 箭田 儀一

だが、この白い骨のひとつひとつには
まだ、死ぬことを決めた者たちの意志が
刻まれている

どんな兵士も、
どんな命も、

もはや戦争の記憶の中で
肉体を捨てた

ただ、

骨だけが、
時の隅で微動する

土の下で眠りながら、
その骨はまだ夢を見ている
破れた旗がなびく、
どこかで煙が立ち上がる
戦場の記憶が風とともに流れ
骨の中に、
そのすべてがまた戻る

銃声のない日々に

こうして、

静かに膝をついて

骨を拾い集める

だがその手は震えない

もう、

痛みを知ることはないのだから

無数の足音の中で
踏みしめられた場所に

ただひとつだけ

本当に残ったものがある

骨たちはただ

震えることなく、

ひつそりと、

時を待つてゐる

広島市長賞

名月

西の空に
抱かれるように

歩いていた

透き通った色の

夕焼けは

想いを寄せる私に

別れを告げ

おだやかに沈んでいく
海の中へと

私はひとり

この海辺の街の

孤独の中に

残された

涼やかな風吹く

安芸郡海田町 竹野内康子

名月の晩

遠く離れた山間の

緑輝くふるさとに

黄金の稻穂は波打ち

彼岸花の群れは

畦道に搖れ

父はひとり静かに

病室に眠る

閉じた瞼に

月光は届いたのだろうか

微かな呼吸の中で

百回目の

この世の秋を

記憶したのだろうか

天に召される

最後の夜

神々しく

孤高を保つ

天空の球形

私はこの街の橋の上で
ひとり、その月を見ていたの、
お父ちゃん

現 代 詩 部 門

広島市議会議長賞

闇屋の源さん

米不足 備蓄米 古米

ふつと蘇る遠い日 闇米 闇屋

色黒でやせた体に大きなりユツク
キラツと光る澄んだ瞳

終戦まもないわたしが小学四年生の頃
蟬の声と共にやつてきた闇屋の源さん
リユツクから手品みたいに出てくる品物

白い運動靴 白いゴムボール

海の魚の干物 いりこ 海苔……

お茶とたくあんを出す祖母
きまつて二人の話が始まる
原爆で家族三人も失った源さん
ゆつくりと とつとつと
土間の上の煤けた黒い梁を見上げて
話しだす源さん

庄原市 奥井 久子

正義の戦争だ　国に命を奉げよと
終戦　正義はひつくりかえった
ごまかしの正義で息子も母も死んだ
正しい戦争なんかない
死んでいい命なんてひとつもない

源さんの握りこぶしが震えていた
原爆で子どもを失った祖母
二人の目にキラリと光るものがあつた

急に話を変える源さん

「命はここ　大切にね。」
左胸を右手でポンとたたく
わたしも　いつものようにまねして
「命はここ　大切にね。」
と源さんと笑い合う

米の売買は当時禁止

源さんは闇屋　警察に追われる人
でも源さんは言う
人間は柔じやない　生きる術を探す
都會の人は米がない　田舎の人は物がない

お金のかわりに米をもらう

その日わたしは ゴム草履を卒業

まつ白い運動靴を米で買ってもらつた

その夜 うれしくて靴を抱いて寝た

少し干し魚のにおいがした

彼岸花が畠道を赤く染める頃

急に姿を見せなくなつた源さん

風のうわさ

矢野駅で警察の手入れ

闇米を線路に投げて飛び降りて大怪我

でも源さんは きっと元気になつて
しっかりと残された家族を守つていると

原爆投下から八十年

蝉の声にまじつて

「命はここ 大切にね。」

源さんの声が聞こえたような気がした

駅

広島市 正本 忠臣

頼まれて 2番線ホームから電車に乗つた

大きな駅で下りて

乗り換えるホームを探したけれど

どこにあるのか分からなかつた

土産物売り場の若い女の人が

駅の隅まで連れて行つてくれた

柱の陰にあつた長い階段を下りて行くと

電車が止まつていた

空いていて窓側に座れた

視界は白い壁で遮られていた

高いビルの間を走り抜けると 人家が続き

黄色や青や灰色の小さな屋根は
様々な方向を向いていた

踏切では遮断機が下りて警報機が鳴つていた

小高い丘が見えた 横に長い塀があつて

埠の上には長い屋根が架けられていた
煙が広がった 何かが植えられていた
時折川があつて

その度にそこで煙はいつたん終わつていた

駅に着いた 屋根のある階段を上つた
裏側の改札口の箱に切符を入れて外に出た

直ぐ道で 道の向こう側は
金網のフェンスで煙と仕切られていた
フェンスの下を茶色の猫が歩いていた

街まで歩いて行つた 家並の中を歩いた

お寺を過ぎた所は空地になつていて

その先に二階建てのアパートがあつた
通路を挟んで両側に部屋が並んでいた
3号室の隣は5号室で

板張りの戸をノックしてみた
返事はなかつた

しばらく待つてみたけれど 会えなかつた
アパートを出て お寺の境内に入つて
鐘撞き堂の石の縁に座つて休んだ
向こう側の縁を灰色の猫が歩いていた

アパートに戻つてみたけれど
人は帰つていなかつた

街で食堂を探した

お金はテーブルの上に置いて出た

アパートの部屋に人のいる様子はなかつた
待つたけれど 帰つて来る人はいなかつた

駅はもう薄暗くなつていた

階段を上り下つて 電車に乗つた
もう小高い丘の風景は見えなかつた

大きな駅で13番ホームに上がつた
電車が来たけれど でも乗らなかつた
戻つて 柱の陰にあつた長い階段を下りた

電車は夜のビルの間を走り抜け

人家の上を通り過ぎた

外は暗くて もう何も見えなかつた
所々 通り過ぎる白い電灯が眩しかつた

広島市 清見久美子

玉つき屋の夫婦は忙しい

親戚の家に二人の息子を預けて仕事する
ある日おばあさんが二人の孫を連れに来て
久しぶりに家に戻った
八月五日だった

二人の息子は死んだ

玉つき屋の夫婦も死んだ

おばあさんは生き残り

おじいさんはおばあさんを責めた

どうして連れて帰ったかと

ずっとずっと責め続けた

おばあさんは二つの人形を並べて

挙んだ

その人形は男の子だった
焼き物で膝を立てて座つていた

かわいい顔をしていた
布で作つたちゃんちゃんこを着ていた
おばあさんはその人形の前に座り続けた
こーちゃん
よーじ
おばあさんは呼び続けた

桃

ぼくは果樹園の暗い小屋に座し

野良着をはだけ

扉を少し開けて

桃がかすかに匂つてくる錯覚にとらわれている

どこか遠くから――

ぼくは驟雨が過ぎるのを待つてゐるのである

一夏の終わり――

樹間に造船所のクレーンがかすんで見える

離れ棲む系累を追うことを徒労と決め

少しずつ罪に慣れしていく日々

冬の陽だまりのよくな記憶のなかで

ぼくはいくたび帰郷を試みたことか

比国から

海を歩いて帰ると便りをくれた父のように――

尾道市 仲尾

修

やがて暗くなる記憶の淵に
ぼくよりもはるかに若い
軍服の父が立つとき
ぼくの記憶はそこから茫漠となつていくのである
いつも――

あの日
冬の戸を閉めながら

弟は
「生きゆくはつねにさびし」と言つたのである
その後 ぼくは
弟のアドレスを知らない

楽しそ運ぶ鈍行列車

三次市 立田 幸子

眩しい朝日の抱擁の中

元気に目覚めた 今日へ

銀の鈴の音ひびかせて

感謝の祈りを

好きな事だけ

好きな物だけ

それが許される今

八十路越えて

鈍行列車は動く

乗車して知る 喜びの数々

年と共に

広くなつた 心の部屋には

宝物の健康が

楽しそ求めての 旅へと動き出す

車窓に広がる 見慣れぬ景色を
色褪せて行く思い出あとに

未知の世界へと

いざなうスマホ手に
楽しさ運ぶ鈍行列車は

今日も

広野を走る

夜の訪問者

その夜 ベランダに
サン・テグジュペリが
ひつそり降りていた

鈴の音の転がる空の
月灯りに照らされて
砂漠は 湖のよう白かつた

緑の服を着て
彼のとなりに座る
マッチを擦つて
暖をとる

夢のなかにも 風が吹く
乾いた砂がこぼれ
地平線をながれていく
リンドバーグも カンパネルラも

東広島市 高橋 克知

今日は 深く 眠つて いる

彼が ノートを ひらいた

星座のスケッチ 羊の絵

そのかたわらに

薔薇や キツネたちの言葉が

ならんで いた

聞きたいことは
たくさん あつた

それなのに 砂は もう
指から すりぬけて いて

マツチを もういちど 擦つた
頬の輪郭が 灯りのむこうに

ぼやつと 浮かんで いた
目がさめるまで 彼を
よく 見て おきたい

バラノマトペ

廿日市市 野田友里恵

桜が舞い踊る日

川に落ちた花を眺めるのは好きだ
水の透明と光に当たつて反射する白が
何度もピンクをまじえて通り過ぎていく
どこからきたのか
赤や黄色も少し紛れて水と踊る
はらり、ぴとん。さらさら、ぴちょん
また一枚、水と出会う音
美しい景色をつくる音

五月雨が鳴く日

雨音を聞きながら眠るまでの時間は好きだ
暗い部屋の中
布団と薄いブランケットに挟まれ閉され
小さな世界で一人きりになつたよう
そんな感覚の中、私に興味なさげな態度で
静かに寄り添うような音

さらさら、ぱたつ、ぽつり、ぴちゃん
今日の私を眠りに包んで過去へ送る音

木の葉が自由を知る日

落ち葉が土と暮らす道は好きだ
茶に染まつた葉が地面と転がり遊びこける
少しの黄色や赤も混ざり
ただの土道ではないことを主張する
さく、ぱきん、かさかさ、くしやり
子どもも大人もやっぱり好きで
少しうずうずしてしまう音
木々が作り出すおもちゃの音

白い息が空に溶ける日
雪が傘にあたる音は好きだ

雨粒では出せない違う音

氷に水が混じりそうな、その両方の音
カサツ、パサツ、トン……

タ、タ、タタ……タツ

静かに、でも悲しくないよう
ほんの少しだけあたたかな音
家の中にいては得られない

雪と共に過ごした証明の音

ふと気が向いた日

ものを書く私が好きだ
自分の感性と、感情と

目の前の言葉と話し合うように

次の言葉を紡いでいく

ひとつの文字、単語、文章に向き合つて
音を奏でるように、編み物を編むように
トン、さらさら、さり、さり、しゅつ

紙に文字がえがかれていく
一步一步を私のこの手で
歩くように、泳ぐように
掘るように、掬うように
飛ぶように、踊るように
言葉を繋いでいく音

私の世界が

またひとつ出来上がった